
少年

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年

【Nコード】

N5549C

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

北が上の地図なら、天国と地獄が上と下で示されるなら、人生が何かにたとえられるなら、ぼくは南極へ旅をした。

その町のその日の最初の呼吸だった。ぼくは逃さなかった。昼に近かった。ぼくはホントはもうずっと前に目を覚ましていた。息を吸い、吐いた。雪で白く覆われておしとやかになっているわけではなかった。酔ったあとの低血圧でもなかった。町はもう朝に起きることができないでいるのだった。ぼくはそれを確かめた。貴重な休みの半日をこの町にあわせた。服薬のチョコレート。午前の記憶。ぼくは涼香が好きだった。

「ゴムつけるからさ。やろつよ」と、ちゃんと言うべきだった。

ぼくは甘い恋愛の幻想を抱いていたのだらう。それは彼女だけでいいはずだった。そいつをつくったり希望したりするのは。彼女のなにが好きだったって、結局そのとびつきりの幻想が好きだったってことになる。彼女と本当にやれていたならこんなことはいわない。この世は女の子の幻想に満ちあふれている。ぼくは見えないそれに向かつて毎日射精を繰り返し、やがてそこから未来を生み出した。そして今は昼だ。ぼくは過去のすべての結果が今の原因だ。とか運命は自分で切り開くものだ。とか議論するのは苦手なので一人で考えようとしていた。ある意味、今がそういったことを考える最後の機会のように思われたからだ。

くそミルクが流れていた。ぼくの喉の中を、外を。やっぱりコップを使うべきだった。紙のパックの嘴。白が色あせる。接吻も歯の色も繰り返すと黄色になる。燃えるゴミは今や再生資源か？我慢できないがやはり我慢しよう。まだまだこれからだ。日は昇ったばかり。どんなに体重をかけてもあと5時間は沈まない。外へ出ると迷彩柄の空。沈まないはずの太陽様はどこにいるのか？気にならずにはいられない。突然差し込んだ光がなんらかの拍子に命を奪うかもしれないとはぼくとフィルムの中の写真以外この瞬間、考えもしないこ

とだ。そのせいかもしれない。ぼくは額に汗をかき、通りに唾を吐き、けしておはようなんて言葉のでない何度目かの朝、そこへむかった。

妄想世界地図ではその自動販売機は歩いていけるところにあった。ぼくは夜を越すために840円分の烏龍茶を費やしそれは一本280ミリリットルで7本を意味した。地図の更新は明らかに遅れていた。

「足でかせげ！とにかく足で！おまえ自身の足でかせぐんだ。」先輩の教えが蘇る。だがそれも青信号が頭の上で赤色に変わるのにきずくみたいだ。通ってしまえば関係ない。後続はついてこれない。ぼくだけが間に合った。ぼくは教えを忠実に守っている。下のアスファルトは固い。少々お腹が膨れてきた。霧囲気をつかめ、流れを自ら作れ、雨降りの道路の匂いを嗅ぐように味わえ。捕らえて逃がして捕まえる。贅沢な時間、黄金色の光が蜘蛛の糸のようにまとわりつく。ああー、ぼくは今、そいつに狙われている。うれしい。おもしろい。目を細める。あちら側の光景はどんなだろうか？目を凝らす。しかれども風は吹き、時は流れる。この場はいったんおさめよう。

涼香というかわいい女の子がいて、くそ学校にいつしよに登校したことがあった。一緒によくありがちな校門までの長い坂を登りながらぼくはかたくなだった。涼香にしてみればぼくがちよつとでもふればいってしまいそうだと思ったのだろう。それだけぎんぎんで張っていた。取り付く島もなかった。後になって、ぼくと涼香の間にあるものは何か、考えたものだった。この世がふたりだけのものだったら寄せて返す波のように何度も愛し合っただろう。ふたりのどちらかが叫べるだけの夢をもっていたらフォークに巻かれるパスタのように運命を共にしただろう。結局は、今こうしてそういうふうに思えるだけ幸せだと感じるぼくがひとり、たばこの煙にまかれて

いる。本を開く。(汝の対面に学べ) ついにぼくは涼香と向かい合うことはなかった。そして、その影にはしばらく追われた。

真つ昼間はカンカン照りで道路から高さ5センチの所では熱気でむんむんして陽炎が見えるかもしれない。ぼくが蟻んこなら十秒ともちほしない。だがぼくは蟻んこではないし蟻んこも馬鹿ではない。この炎天下動いているのは赤に青、白、黒だ。言葉にすれば色とりどりだが今日の暑いという一色の気分にはかなわない。車の排ガスと騒音は起きたてによいものではない。風のこない窓辺を離れる。昨日のスパイゲームは疲れた。

「スパイゲームをしましろう」夢の中で涼香は言うのだった。

お互いに距離を置き歩く。頭ん後ろとか、はじっこのまつげ、鼻や口、とにかくいろいろんな所を使って相手を追うゲームらしい。ぼくはお腹がすいていたのでどこかでご飯でもと思っていたのだが彼女に言わせると、「こつちが先！」らしい。飢えた狼が獲物を追うようなどという表現はよくありがちだが実際に適当な表現とはいえない。いったい何人が狼が獲物を追うシーンを見たというのだろうか。そしてなぜ見たもの以上にこの表現の意味するイメージが的確といえるぐらい伝わるのだろうか。教育のせいかな。そう、意味が通ずるならここでのぼくは目に限らず鼻も耳も狼に違いなかった。注意深く自分にしか気づかないくらい息づかい。涼香の足を頭を髪を胸を追った。だがそれはとどかなかつたらしい。数分もして彼女はぼくの元へ戻ってきた。

「ちゃんと見て！それじゃあスパイじゃないわ！」

スパイがなにか、ぼくにはわからなかった。最初このゲームだから暇つぶしの散歩だかの事を聞いたときぼくは探偵ごつこと言ったものだがそうではないらしい。ぼくは最近テレビを付けていなかったのだ。おそろくそつちの世界で、スパイの何かでもあったのだらうとたかをくくって、「ああ御免、スパイだスパイだ」とうなずいた。

彼女は怒っていたがそれはぼくがスパイを馬鹿にした風だったか

らか、ぼくが若いのに年寄りの感じをみせたからか、わからなかった。それはぼくの反省材料だった。

今度は彼女がぼくを追いかける番だった。ぼくは通りを右、左と渡り、一階の本屋と二階のスポーツ用品店を通ってそれぞれ別の出口から出るという離れ業をやったのけた。通りながら店のものにつさい手を付けなかったのとあわせて、新しい土地での新しい成功だった。しばらくは彼女を頭の後ろやもみあげ、靴の踵あたりで感じていた。だがそれもしばらかった。彼女を感じなくなった。涼香はいなくなった。いや、ぼくがいなくなったのか？

ぼくは家に帰りソファにうずくまる。ヤドカリのようにケツから入ってその殻は片手にビールの缶を持っていたのとあわせて二時間分ちようどよかった。携帯の音で目を覚ますともう町は暴走族がうるうるする時間だった。

彼女からだ！とわかったが、わかっていなかった。今日はカンがさえないな、と一人言い電話にでる。きつと缶ビール一本という安価でお手軽な幸せに浸ったせいだろう。もっともつと望まねばならない。電話の主はリーダーからで、メールではなく直の電話があるということはそれなりの用事があるはずなのだが、ことリーダーという男に関してはそうではなかった。まあ、カンの悪いついでに大事な話かもしれない。ぴりぴりなる音がいつまで続くかしれない。ぼくは冷静にタイミングを計って電話にでた。

回線は無事につながったがどうしてこんなに話す相手と体温が違うのだろうか。方やジャングルに一人残された男の救出を求める切実な叫びで、それを受ける相手はたとえ、今おまえの部屋が火事になつてるといわれても、ああそうか。教えてくれてありがとう。今きづいたよ。というような男。実際火がついていたのはリーダーの方でジャングルからの救出の要請もリーダーの方だった。リーダーはボギーと喧嘩したらしかった。そしてその取りなしをぼくに頼むというのだった。ぼくは危うくリーダーのジャングルに迷い込みそ

うになった。たまげて、あきれ、あわてた。立場は簡単に逆転した。彼は話しながら落ち着いていき、ぼくは動揺し部屋に火の手があがってないかを確かめた。これ以上の深入りは禁物だと判断をくだした。ぼくの口と手は見事な連携を見せ、「わかった。」と言い、電話を切った。族はリーダーだ。いくらアメリカに留学してきたとはいえ青春ドラマそのものだ。ボギーとの仲をとりなつてくれ。なかなか言えるセリフではない。とにかく、しかし、いずれ、また、であるからして、リーダーは呼ばれはともかく悪いやつじゃない。ぼくはボギーにメールを送った。

前の車のリアワイパーがぼくを催眠にかけているのかなかなか先に進まない。本日は、正確には夕方から雨となった。何度目の祈りが忘れたところにその匂いはやってきてぼくをじゃれあう犬のように喜ばせた。だからぼくは機嫌がよはずだった。晴れすぎても雨すぎてもいけない。アスファルトを太陽が焼いて雨が溶かす、ぼくはおいを嗅ぐ。また太陽が来て焼く。雨が降る。ぼくはこれをご飯のように一日三回味わうにはどういった交渉がなされるべきか、あるいは誰に注文をするべきか考え、交通渋滞の緩和をはかった。ボギーの所へたどり着いたとき外の明るさは減っており、その闇への勢いを多くの車がそれぞれに星のごとき輝きを持ち寄ってせき止めようとしていた。

リーダーはフリーターでクレーマーで妄想通信家だった。ボギーに言わせるとカリスマの変人だった。ボギーはそのカリスマの右腕であることを私人間の内に公表していた。その腕がキレた。始めから片腕だったリーダーの腕はなくなりリーダーは足で電話をかけたのだらう。ぼくの出番らしかった。リーダーがいうにはボギーが怒ってもう話もきいてくれないらしい。ぼくはボギーと会うためにリーダーが着信拒否されているメールであらかじめアポをとっていた。ボギーとのメールは飛脚をつかえば彼に5分走を5セット走らせる

程度のものだった。ぼくとボギーはお互い調子がよいと簡単だが専門的なメールのやり取りを何度もするのだが今回は飛脚としては初歩の歩だったろう。ときには彼を夜通しかけずり回したこともあったから。今回は楽だ、なんら恥づべきところではない。ことに理由がリーダーの事であればなおさらそうと言える。のだ。

ボギーとはそれぞれの仕事が終わってから会うことになっていた。体調がよいのは月曜日のせいだった。ぼくは最近月曜日に調子がよいのだ。それはぼくにとってちょっと異常な出来事で心外で、ぼくは月に呪われているんだということで納得していた。合流したぼくとボギーは南に向かい飯を食った。そこはカップルか家族ズレでなければ駄目なような場所で最近はそのような場所が増えていた。ぼくらは結果だけを見ているようだった。あのカップルの結果があの家族連れ、あのガキとあの子が仲良くなってあのカップル。ぼくらは世間が狭いのか一見幸せそうな家族や、一見ラブラブなカップルなどを大抵の場合目にしホモのカップルや時代を飛び越えた気違いとやらを見たことがなかったが、周りにいわせればたった今見た。ということになるのだろう。ボギーとぼくはそれだけ人目をひいた。ぼくらは結果を残せるのだろうか。ぼくらにとっての結果とはなんだろう。ぼくらは特殊な世間をつくりだし、見るものは平凡だった。ぼくがボギーの皿の生ハムに手を付けボギーがぼくのエビをフォークでつり上げるとそれをなおさら感じるのだった。ぼくは比較的平気だった。が敏感なボギーは空気を察知し色めきだった。これからのぼくの態度や言葉使いで何がどうなるか試したい気分でもあった。そっちの道や経験は何をもたらずのか。ぼくは気が短く今までこんなに駄目なら替えてしまえ！とも思うのだがまだその時でもないなと思った。ボギーはたばこを吸い、ぼくは勘定をつかんで店をでた。その晩すぐにリーダーの腕はくつきその右腕の手術を成功させた。ぼくは別に満足するわけでもなくリーダーに左手での愛の仕方を教えるのだった。ハ用はつかいすぎたんだよ右を！ハ片腕しかないリーダーは早く左腕を見つける必要があった。しかしかつてはそれは

あつたのかもわからない。そこまでは聞かずまたの再会を匂わせ、眠った。

・夏美へ

「誕生日おめでとう。いま滅茶苦茶酔っぱらって家にたどり着きました。自分の親父くらいの上司の飲みの付き添いで3次会までつきあいました。あなたの笑顔にあいたい。正直な本音です。たとえばファック百回言ってもあなたは対象外です。あなたに捧げる愛こそすべて！たとえ死ぬほど酔っぱらってもあなたのもとへとたどり着く自信があります。人生は相変わらずファックだけれども今宵も星は輝きぼくたちをいつまでも結びつけています。力の限りの愛をこめて誕生日おめでとう！！！！。」

夏美は自分の名前が女つぱいのと、暑い夏、寒い冬を嫌っていた。だから夏には北、冬には南へ旅をした。面舵いっぱい！取り舵いっぱい！よくふたりは朝からテレビのスクリーンの前にならんで陣取り酒をくらって長い航海を繰り返したものだ。そして世界には少しだけのおもしろいことや沢山の辛く憤る事があるということを知るのだった。それは帰ってきた二人の十分過ぎる成果だった。ぼくらは夏美作の賛美歌を歌った。賛美歌というかリーダーに言わせるとただのリズムにすぎなかったがそれはふたりのそのときはやりだったのしかたがない。

「ファック！ファック！ファック！」たばこの煙に身を任せ自分を洗淨する。

「ファック！ファック！ファック！ファック！」

ぼくらはアメリカに汚染されていた。憎み、そしてうすうすきずいていたが愛していた。その悪意のない暴力から逃げるためにぼくらの未来のためにぼくと夏美は中国に渡ったが、わずか一ヶ月で挫折。その後ロシアに移り一年滞在した。ロシアでは毎週土曜日に日本の情報が入りそれにすがりついた。ぼくはその後ドイツにいきど

イツの孤独にあと一年耐えたがそれは蛇足だった。今年も夏が過ぎようとしていた。ぼくはあつい夏の間、夏美に会うことはなかったが、それを感じた。夏美はやっぱり夏美だった。ぼくは夏美も夏も大好きだった。あの辛い時代。いもでもはつきり言える。あの辛い時代はぼくの人生に二度とないだろう。それはぼくがそうしないからだ。辛い時代を共に過ごした仲間、夏美をぼくは忘れない。カンと勇気の二つを手にぼくは戦うだろう。夏美は春秋担当官。ぼくは夏冬担当。ドイツから帰り一年、ふたりの道は分かれていた。

生まれ変わるはずのない雨上がりのさわやかな朝。何十年も前の初期型コンピューターの起動のように立ち上がる。ときどきくそみたいなことでもそれが自分の思い通りになることならやる価値はあると思いがちだ。心臓発作をおこそうがおかまいなし、目覚めて3秒、エンジン全開。眠いなんて思わない。感じない。飯をがつつくが一晩寝かせた口の中のたばこのヤニがなまなましい。うまいとは思わない。まずいとは思わない。朝から飯に憎しみをたたっこむ。ぼくは飯がにくい。がつつく、舌でもかもうものなら最悪だ。

朝から大変なリスクを犯したと行ってなら一日は変化しない。なんら、変化しないのだ。まじないのようにはぼくはなんら。なんら。を繰り返す。本当はぼくは魔法を信じていた。ある瞬間からすべてが好転する。すべてがうまくいく。なにをもつて良しとするか明確なるビジョンがないまま盲進する。ぼくはこの世で最悪な男にもなれるし最高の男にもなれるのだった。大きなお金と美しい女。幸せな時間に飽きのこない夢。それらをつかむためありとあらゆる手段が考えられる。ぼくは脳を持っている。考えつく考えをすべて実行できたらそれはかなうだろう。問題はそれらをするかしないかで怠けないか怠けるかでうそをつくかつかないかだ。涼香について言えばぼくは自らその芽を摘んでいた。ぼくと涼香の間には当時なんだからわからない世界があって、そいつがものすごいものだ。当時のぼくは思っていたのだった。ぼくはその時代の なんだか と わか

らない　をすんなり越えることができないでいた。世界は生きてな
んていねえのにみんなでそう見せやがって。ぼくが思っていたそれ
は今となつてはすべて迷信だった。世界とは人々の妄想で人ひとりの
妄想ではない。神は一人ではない。世界の多数決。世界の順番待
ち。ぼくは例えば相手がぐーを出しているのをわかっている。ちよき
は出さない。3のカードで7に挑まない。ぼくはパスを繰り返して
いた。それで時間を食ったのだった。お腹の充分みたされたぼくは
負けを清算するために行動を起こした。これまでの食費代とこれか
らの分を稼ぐためだった。

夏の間、何度も夜に水シャワーを浴びることが習慣になった。独
特の匂いだ。水の匂い。ぼくは何度も繰り返す。何かをまといまた
洗い流す。繰り返し繰り返しぼくはそれを、水の匂いをかいだ。ぼ
くが繰り返したのは水の匂いを、タイルからわき上がる水の匂いを
嗅ぐことだった。繰り返すことにぼくはヘルスに勤めている女の子
を自分に感じていた。試しにカガミを見る。ぼくは悪くないかなと
思うのだが、その顔は勝っている顔でも勝ってきた顔でもなかった。
それは正確な判断だったが気にいらなかった。ぼくは人を見、話を
聞くとその人が勝つか負けるかわかるのだった。ぼくはあるときヘ
ルス嬢でもあったが、時には年寄りの人相見だった。まだいつまで
も勝ちを求めて死ねない亡霊だった。迷いのない言葉を話すべくよ
り三つ下の妹は勝つだろうと思われた。勝つ流れに完全に乗ってい
たし、それを外さないように注意できる女だった。ぼくは大胆だが
繊細だった。冷静で情熱家だった。それがぼくのも特性でそれが勝利
を遠ざけているようだった。妹を駅まで車で送った後、いままで吸
わなかったタバコを三段跳びのジャンプのように続けざまに吸い、
オーデオのポリウムを最大にした。ぼくは頭がいかれているのか？
ぼくの役は勝利と敗北をそれぞれ片手にもっていて自由に動きがと
れないバランスーなのか？彼女を勝利へと続く駅へ送り、帰り道ぼ
くはその反対に向かうのだった。ぼくはくるくるしていた。車が前

転したりするものなら前転させていた。

「ガスが！」

「くそめ！」

アクセルを踏み車を下手なラジコンカーのように動かす。ぼくは酔がっていたが注意深かった。当然のように無事に、まったく無事に部屋にたどり着く。それだけだった。あとアルコールを少量で天秤は釣り合うだろうと感じた。ぼくは敗北をゴミのように捨てればいいのだ。片手に勝利が残る。ただあまりに勝敗に関わりすぎて勝利と負けの区別がつかなくなり混乱しているだけだ。持ちすぎているのだ。ぼくの仕事はゴミを捨てること。選んで捨てていくことだった。で、ぼくは分析家でも人相見でもなかった。そのことにだけはいくぶん気づくべきだった。片腕のリーダーが思い浮かぶ。リーダーは自分の目を死んだ魚の目と表現する。それはまったくうまい表現でぼくが見たときは死後四十八時間以上は常温でほっとかれた目だった。まったくうまい表現だった。たしかにそうだ。その目は濁って光など写さないたまげたまなこだった。

「ああ、それは確かに魚の目だ」ぼくは言ったものだった。池や沼にすむ鯉や鮒、どじょうのたぐいの目だ。広い海などめざさない。目指す必要もない。しかし濁った狭い水の中でも真実とやらをつかめる目。リーダーの目、片腕のリーダー。それはまあまあかなと思う。

ウィーン・ジーン。ウィーン・ジジジーン。ジャリジャリジャリ。遠くで何かの音がする。朝の気配だ。まだ寝ていよう。光が薄い。もう少しで寝ていられなくなるくらい日が上がる。まだ出番ではない。そう思ったかどうか雫は眠っている。ぼくは珍しく朝から人に気をつかい、いつものリズムが崩れていることを楽しんだ。妹の雫は長い休暇がとれると外国から帰ってくる。そしてぼくの部屋の二分の一に住まうのだった。酒臭い頭ががんがんする。昨日のシャツのたばこの匂いが体の心までしみこんでいる。がらがらな喉。軽快に踊

る風が髪をばたつかせる。ぼくはそこへ向かった。片手のペットボトル一本で砂漠をわたろうとしている男の背中だった。口が開き、閉じた。ぼくの向かう先はまったくの現実で、向こうはぼくという塵気楼をつかもうと今日も躍起になるのだった。その度にぼくは押したり引いたりを繰り返した。望まない性交渉のようだった。やがて日が沈み塵気楼は消えた。誰もそれを探そうとしない。みな休むのだ。目に見えるものそれはビールだったり雫だったりした。闇雲に追ってもつかめない。冷蔵庫にビール。勝者に雫。向かい合って飯を食う。憎むなんて嘘みたいだ。がつかうなんて食わなくていい。最初の数分間ぼくはビールに夢中なふりをした。雫とはメートルも離れていないのに銀河を隔てているようだった。互いにそんなに口マンテイストとはおもわない。男はいつも突然訪れるこういった勝利に照れるものなのだ。ぼくは魔法の箱船をつかい銀河を飛び越え雫にあわやぶつかりそうになるのをおそれたのだ。それで適当な距離をたもつためビアのグラスをもう一つ用意した。

雫は風の研究者で風の容量・品質保持や新製品の製造等に携わっていた。で、風を一番作り出しているのは海らしい。海の正確には潮の満ち引きが風を生み出す一番の母らしい。ぼくなんかは一番最初の風がどんなのか気になって聞いてみた。一番最初の風がなければぼくの目の前あたりでの風は生まれないだろうと考えたからだ。

「一番最初の風は時間よ！」

雫はそう言い、もはや意味もなくついているテレビのボリウムをさげた。そこから怪談でも始まるのだろうか。その時間がたち雫は珍しく酔っているようだった。ぼくなら一番最初の風は風だよ。と答えたらう。そこにはプロとアマの紙一重の差があった。風・時間？「おかしいとおもってるの！」ぼくは今度は尋問されていた。くりとつばを飲み込むほどではなかった。

台風がちかずいていた。雫に言わせると台風は後悔の塊。もしくは車のエンジンブレーキ。北風はチーズをかみ砕く歯で南風はペン

キ塗りの刷毛。西風はハイテクのブルドーザーで東風はミックスジューズ。これらは彼女の独自の研究成果だった。そんな話が続いた。ぼくは点滴を受けるように無駄なくそれらの興味深い知識を吸い取った。雫は研究者としての成果を余すところなく披露しているようにみえた。研究と発表は対なるものだと今日知った。ぼくなら例えば犬も歩けば棒に当たるとか、やまない雨はないだとか。新しい靴を履くとき靴擦れをしない方法だとかいった知識や知恵を人様に教えはしない。それはしまっておくものでサービス無料奉仕品ではない。ぼくは幸いにも今日、奉仕に預かっていた。ぼくにとってはそうだがそれが研究者たるもののプライドなのだろうか。ひとそれぞれ、のやり方なのだろうか。その発表は降り注ぐ恵みの雨のようで、ぼく一人が向き合っただけで受けるにはいささか規模が大きすぎたように思う。ぼくはその雨をとっておく乾かないプールがあればいいのと、びしょぬれになりながら雫をみていた。

とうあつせんだかとうこうせんだかとかくひらがなの音声のまま入ってきた雫の言葉はその線が縦に3本並んだらここを出る。とのことだった。ぼくの3本線は常に足下にあつたが、それだけではぼくはここをでられなかった。

踏み込む一步は確かに三日前。その一步の続きは明日かあさつてか。疲れ果てて寝むってしまう。今日は昨日の続きか。今日は明日に続くのか。昨日のぼくの18時から23時くらいは40年後のぼくの時間だったに違いない。その未来の時間を持ってきてぼくは休養したのだ。20代のぼくが本来持つべき時間を探して繰り返して時は過ぎていく。確かに踏み込んだ一步、振り返っても足跡さえ残らない。ただそれが明日の方面にいい結果として繋がる事をぼくは知っている。その一步は過去の清算のために使われてはいない。その一步は確かに。いつかだれかの流れ星になるのを待っている。

ぼくは過去というエネルギーをよく理解していた。その有効性も知っていた。まだ学ばべきもの、とりだすべき引き出しの中身がそ

ここにあるようだった。ぼくは昔を、さらに昔を、ちよつと最近までかじつてやめたフランスパンにバターを付け始めるように思い出していた。限りない途方もない旅のように当時は思われた。明らかに清算の旅だった。それは報いといえるもので当時のぼくは報いといえれば悪いことだけのようだった。地獄ではそれも当然。それも希望をなくすための一つの手なのだ。その徹底したやり方には敬意を表したい。ありとあらゆる手段と方法とアイデアを。ありとあらゆる手段と方法とアイデアを、ぼくにとって忘れられない祈りの言葉だった。

ぼくは地獄で一ヶ月も精子をださずにある思いを文書としてつづったことがあった。それはぼくはくそだとか涼香、あなたはすばらしいだとかいうたぐいの物だった。それは果たして成功した。だが、ぼくの一ヶ月ほどの成果はたった一本のHなビデオテープで覆る。現代の驚異。時代の幸せ。ぼくは学んだことがあった。ぼくに頭の中のアイデアや作品はぼくの精子の量に比例し、精子をだしてしまつとそのフアンタジックな考えは全くに消えてしまつということだった。ぼくはアイデアを浮かべる、そして書き留める。構想をねり設計する、作品を残す。頭んなかで思いつかべたことを現実を持つてくる。その繰り返しこそよいものが生まれるための確かな行為だといえた。好意が悪意に感じられる監獄。凍てつく冬のやさしさ。失敗が成功、成功が失敗。心が一つに結びつく冬の美しさ。寒さがあたたかく、ストーブをつけすぎた室内は頭痛を誘う。その笑顔を乗り越えていけ。スケルトンだからリュージュだかのそのりのようにものすごい勢いでゴールへ。通り過ぎてもゴール。

ぼくは紙とオイルとライターを持って冬の夜の町に出た。深夜徘徊はおてのものだった。いきさきはすでに調査済み。小さなトンネルは大きな道路の下を垂直にくぐる冷たい空間だった。良くありがちないろいろな落書きが描かれ、ぼくはまえまえからそこに目をつけ

ていた。ぼくの不眠不休の一ヶ月がそしてその作品の中身たる四年間が炎と呼ぶにはあまりに規模の小さいジツポアのオイルによって、きわめて低温のとり火でとけていった。そのたった30枚の中身は完璧にちかかった。涼香の悲しみをストローで吸い続けるシーンなどはもう二度と書けないほどのものだった。ぼくは仕事を終えたとき初めてなにかを成し遂げた感覚をもったものだった。その感覚は大事だった。そしてなぜ燃したのか？それは思いを証明するためだ。本当にするためだ。ぼくは涼香のためにそれを証明し、それを捨てねばならなかったのだ。ぼくにとって証明と棄却は一セットだった。ぼくは四年を一ヶ月に縮めたのだから当然だった。腐りかけのもののみてくれを繕っただけだった。それはどんなに本物に近くとも食べられやしないのだ。ぼくが地獄に堕ちたのは腐りかけのそれをどんだん腐らせながら日々の生活のスパイスにいつまでも使っていたからだ。地獄で一番深い夜がおわった。小さなトンネルに小さなシミをつくったぼくはその夜を越えて地獄に階段を積み上げていくことをはじめた。

ぼくは金を使うこと。喰うこと。出すこと。シャワーを浴びること。寝ることを繰り返し繰り返し、まじめに繰り返していた。ぼくはなにかにつけて大騒ぎしなくなっていた。あえていうなら世界が騒ぎすぎだった。世界とはテレビとビデオと音楽だった。だが追いつけた夢にあきらめをつけた者の感覚をもつことはなかった。それは結果だった。ぼくは昼間外に出ず深夜の町を徘徊した。この世は誰かの夢。もしかしたら百年後のパソコンゲームの主題。ぼくは自分の意志で動いていない。あの遠くに見える建物に何かありそうだ。いつてみよう。そして実際あるのは何かであり。何かしか無いのだ。膝の筋がちぎれよじれそうなくらいキツクの練習をした。ファンタジックな味はしない。鏡の前でイーをする。暗闇を削った刃こぼれ。真っ青な顔。愚鈍な神経。憤る感情。驚喜の拳。ぼくの笑顔。ただれた光。瞳の一点。地獄の記憶。一日の収穫。利益の追求。にんじ

んの色。お腹の中。匂い。オナニー。髪の毛。影絵。呼吸。涙。遠くに感じる絵。なりやまない無音。自制心。シートをする音。明日への時間。時間。嘘。いつでも手の届く範囲に咲く花。砂ぼこり。静電気。黒く光る壁。かつてぼくはまちがいなくひつきーと呼ばれるもののたぐいだっただ。

「人生には自分なりの物語は必要でしょうか??」夏美が酔っぱらいメールをいれてくる。ぼくもだが夏美も酒に弱くなってしまっていた。簡単に二日酔いしたあとの夜、ぼくは新しいオナニーの仕方を開発した。それぞれが履いている靴のごとくそれは個人的なものだった。夏美には知らせなかった。自分なりの物語、百人が百物語百世界。ぼくは靴を新しくした。それに夏美はきづくだろうか。ぼくは二年。籠もった。その間、夏美とリーダーと一哉とだけは交流があつた。三人だけだった。ぼくは日々の生活にリズムを付けるため断食や、断眠の実験を行った。あるいは床屋でもないので自分の髪を自分で切った。ぼくはぼくの過去を後悔などしていなかった。それは言葉にできないものあつたがあまり覚えてないからでもあつた。だが明らかに過去が現在をつくり現在が未来を作っていた。流れは一方的だった。

「勝利が怖くないか? たった一度の勝利がその人を型にはめて、まわりに囲まれてしまうのが怖くないか?」といったようなことを一哉に聞いた。一哉は雫に似ていた。段階を踏むことを恐れていなかった。勝利に悪びれなかった。

「たった一度の勝利では本当の流れには乗れない。目的に辿り着けない。最初は勝利へと向かう船に乗り込む権利を得るようなもんさ。チケットだよ。あとはその船で自分の仕事をするだけさ」といったようなことが答えられた。すべてこれらの言葉は通訳による。ぼくらのもつ言葉はそれぞれに違うものだとすることに気づかなければならない。自分の仕事。船。ぼくには目的は一緒でも例えば船の色

が気に入んなかったし。途中で燃料や物資、人を乗せるために留まるのが腹立たしかった。やり方が気に入らなかつた。ぼくは確かに昔、どこかで船から降りたのだ。それは自分の意志で、やつぱりここが地獄だとしてもぼくの存在はぼくの向かう意志そのものだった。それを忘れてはいけない。ぼくは消して負けてここにきたわけではない。ぼくは地獄をのぞんだのだ。ここにはぼくの望む何かがある。大事な忘れ物があるのだ。ぼくはそれをとりにきたのだ。しかし、当時のぼくは地獄の毒におかされ、すっかりそれを忘れていた。記憶がすり替えられるならそうだった。夢と現実の区別がつかないのよりたちが悪かった。

愛沙と会ったのはぼくがうすうすそれを思い出しかけていた時でその始まりに近かった。最初はごく普通にあいさつや戯言をかわした。それはごく普通だった。それがおかしいことだと愛沙は思ったようだった。ぼくがピントはずれな返答をしても思ったのになにか意外に思ったようだった。言葉がある程度思ったより通じたのだ。ぼくは後からこの時のことを思い出すと不思議なのだが最初は愛沙についてなにも思わなかつた。何、とは好きだとか、かわいとか、やりたいとかのたぐいだ。普通に入っただけだ。まあそれがおかしい事といえば言えなくもなかつた。ぼくらはテレビのついた休憩場で二人きりだった。夫婦団らの風景だった。あれが一番二人の距離が近づいた一瞬だったのかもと思う。あれは覚えておくべきことだ。あれこそはいい思い出でぼくの未来の正確な理想ビジョンだった。ぼくは半分心を閉ざしてちよつとよかつた。ふたりは同じ方向を見ていた。あれこれ話した。ぼくは彼女の横側にいた。ぼくと愛沙。正確には他の店員と愛沙とぼくは同じ職場で働いた。愛沙とぼくとの距離は最初に築きたい距離を保った。ぼくがいろんなものを手に入れていたら、ぼくがもっとゆっくり味わうということを知っていたら、それ以上は望みはしなかつたろう。それはベストだった。ぼくは一日の数時間をベストな雰囲気ですごせるのだ。それは愛沙も同じだった。それがなにも問題を起こさないという条

件付きの信頼感だとは当時のぼくには気づくはずのないことだった。ぼくにはその現場がすべてだった。そこでしか人と話すことなどなかった。部屋に帰って一人だった。ぼくは彼女のためにその一日数時間を何日を何週を何ヶ月を演出するべきだった。ぼくにとてもそれは居心地のよい幸せな時だった。そんな意識のない最初の時が一番いいときなのだがそれは宝くじを買っただけで満足しているのと同じだった。ぼくは結果をもとめた。当選しているかどうかどうしてもしりたかったのだ。そのくじがたまたま手にいれたものだという事などもう忘れていた。ぼくは自分の時間のことだけを考えた。ぼくは自分の事をもっと知ってもらいたかったしもっとかつこつけたかった。だが愛沙は最初でそれを充分わかっていたことと思う。だから驚いたのだ。場は本当によかった。その場は。ぼくらの息もあっていたし、仕事ははかどり、多少のトラブルも活気にかわった。問題はその場所以外のところにあつた。その場がいいのはその場にわたって帰る段、愛沙の顔が曇るのを知っていた。その場以外での糞ごとに違いなかった。ぼくは仕事が終わりうつむいてタバコを吸う彼女に惚れてしまっていた。ぼくが彼女に教えられたのは押し殺した吐息やあえぎ声、乳首の色やめくれたびらびらではなかった。本当のたばこの吸い方だった。

不穏な空気というものを人は察知するものだ。目の前の危険に真正面からぶつかる必要などない。彼女には途中からわかっていたはずだった。惚れられちゃったかな？笑顔はなかった。ぼくはこのまま思いを押し殺しやり過ぎすやり方をしていたが、それでは繰り返した。ぼくはそのない地獄の底を求める冒険者ではなかった。結局彼女はぼくの思いを完全に受け流せるほど大人の女ではなく、うざい、と切って捨てるほど残酷でもなかった。ぼくの思いは半分はうれしく半分は迷惑だった。で、半分残ったぼくの思いの残骸はぼくの信仰のマリアとなってぼくの地獄の道を照らした。それからぼくはここが本当に地獄であるということを知った。正確には

気づいた。ぼくは地獄からはい上がるうとしていた。ぼくの決断は早かった。ぼくは少しだけよんどんでしまった彼女との場所を去ることになった。半分残してくれたのは彼女の優しさか自己保身か、とりあえず次の日も正常に場は回った。その点での二人は息が合っていた。何事もなかったかのように冷静にかつ親しみを忘れず互いに接した。場はぼくが望みさえすれば月日という換気扇によって浄化されるのは明らかだった。ぼくは場に優遇されていた。しかしぼくは船を降りた。逃げたのではないことを見せつけるために数週間の残務整理をこなしした。ぼくはあくまでもかっこつけた。駄目だということを知ってしまったことに意義を求めた。ぼくは幸運だった。なぜならそこから去っても結果、地獄から抜け出せたから。そこから去ってしまったのは間違いだと今のぼくは後悔ではなしにいいきれ。彼女のことをつかみ取るにはその場に留まるのが最善の道だったと今はわかる。逃げたつもりでなくとも逃げたのには違いなかった。かっこつける余裕がよけいなものだった。だだをこねるべきだった。いくら繕っても無駄だった。有無を言わずそれは逃げたと当時のぼくがいたらいいと思った。そこに残ることで変わった未来がたしかにあったはずだから。当時のぼくが思っていたほどそんなに人生は捨てたもんじゃなく厳しくないものだから。だからそこには残るべきだった。しかしぼくは愛沙に強引に告ぐつた後少ししてそこを去った。ぼくはきちがいの一番星だった。

はたして、そこをやめて選んだ次の場はとにかくひどいありさまだった。こんなのは初めてだった。そこには王子がいてその姫がいて国民がいた。ぼくは流れでこの国にやってきた乞食だった。いまにも死にそうで死にたくはないと仕事に意欲を燃やしてその熱意によって国王に仕事を与えられた。ぼくはうまくやった。できるはいいではかなりうまくやった。ぼくは王子に疎まれていた。そこでのぼくの仕事の目的は第一に金を得ることだった。そしてそのためにはその職場を抜けるわけにはいかなかった。ぼくは図らずも

愛沙がタバコの煙を吹きながら言った、冗談とも本気ともとれる言葉を思い出していた。「金がすべてよ」ぼくは本気も冗談でもなしに「ああ、そうだね」と答えたが愛沙のその言葉の重みと意味を、新しく入ってきたこの国で感じる事ができた。ぼくは学生で、バイトで、簡単にぼんぼん職を変えられるお気楽な身分だった。愛沙はどう思つたらう。ぼくとの関係なんて笑い話にもならないのだ。社会で場合によつては一人で生きていかなばならないのだ。場を大事にするのは当然で、いい場を作ってくれるぼくが重宝されるのも当然だった。だれが身分を作つたのか中卒、高卒、大卒。それぞれには容易に取つ払えない壁があつた。そしてそれを見過ぐすくそ教育とくそ社会。くそ！だが彼女を、ぼくが初めて告つた彼女をだれが一人にするものか！なんで、今、こうしてぼくの地獄でぼくとの身分の違いで、ぼくのくそみたいな時代に巡り会わなければならぬのか！くそ！ぼくは思った。思うだけでなく叫んだ。

「くそめ」

「くそ」

「くそ」

その頃、ぼくの中は糞でいっぱいだった。ぼくは汚らしかつた。だが仕事はこなした。場のことなどいっさいお構いなしだった。場を作ろうとやつきになつてゐるやつがいたからだ。王子と姫がいた。国王もたまにその新国家の運営を見学に来た。まだ新しい国だった。ぼくには王子を打ちのめすチャンスは何遍もあつた。初めて人に殺意を覚えた。消えてしまえ！がふさわしい王子だった。王子はなにかにつけて功をあせていた。彼はいつも自分が中心でないと気がすまなかつた。自分こそが正義だった。ぼくが感じるにいろいろな劣等感やかつて受けたいじめの反動に違いなかつた。彼は別の国からきてその国で散々な目に遭つていたに違いなかつた。そしてこの国で姫を見つけ、王子になつた。その姫は王女だった。彼を王子にしたのだから間違いない。たしかに悪くはなく、愛沙と比べてしまふぼく以外ならだれもが望んでもおかしくはないだらう。その場で

は唯一の新参ものだった。ぼくは姫にも王子にも王様にも気を使わなかった。場の雰囲気をつかんでからもそれを変えなかった。ぼくは実を言うと始めから気にくわなかった。それは王子が立場で人を区別するタイプだったからで、自分が受けたいじめを強い立場で人やり返すことで優越感を感じトラウマから脱却しようとしていたからだ。まわりもそれを増長させていた。長い物には巻かれる、太いものには飲まれると、王子を見ていたかはしらない。ぼくにいわせるとただの臆病な犬だった。すこしでも同情しようもんならつけこまれる。ぼくは姫ではない。なにが怖いのかよく吠える犬だった。犬が癩癩をおこしたらだれもがお手上げで関わりたくないよ。うだった。幸いその犬は女には変にやさしく紳士ぶった。女にはかこつけるところはぼくにしていたがそれが表面上だけだと気づきそれにはぞつとした。犬は女にもなにか憎むべきトラウマがあるらしかった。ぼくは王女に少し同情し、愛沙がこの場になくてよかったです。と思った。愛沙がいたらぼくは革命を起こしたろう。ぼくは奴をたたきのめす。まちがいがなかった。それはドラマチックでも綺麗でもなくともいい、ぼくが王子に靴をなめろ、小便で顔をあらえ、そうすれば俺がここから出て行ってやろう。そういわれればぼくは二秒で決断する。ぼくは結果のために今を捨てる男だった。確実に近い結果のために使えるものは人の何十倍もあった。だが、愛沙はここにいない。ぼくはそのいかれた世界でまじめな仕事をした。しばらくその国と国民が平和だったのは王子の八つ当たりがぼくに集中するようになったからだ。それはある種、必然だった。王子は王子の過去も今もすべてぼくにぶつけてきた。ぼくを排除すること。王子にとって王への道だった。ぼくは排除されなかった。代わりに見たくもない人の弱さや汚らしさをこれでもかというくらい見せつけられ喰わされた。あまり糞！糞！いうもんじゃあないなこのときばかりはそうおもった。

「くそ食らえ」

ぼくは王子の意にそぐわなかった。ぼくは王子に惚れられていた

のかもしれない。お互いやり方は違ったが克服する者だった。共通点をみつけるのさえいやだがそこは同じといえた。王子はおそらく王となるに違いなかった。弱さを克服できたかどうかにかかわらず、世の中はそうすてたもんじゃないから、大丈夫だろう。ぼくとしてはくたばって死骸になって欲しいが王になっていたらそれはそれでいいことだ。ただ彼はぼくのようにアル中になったり自殺を考へたりしないだろう。かれがアル中になったら姫を殴るだろう。彼が自殺をかんがえたら実行するまでに、何人それに巻き込まれるか。ぼくはかれが王の国にはいかない。周りの誰にもお勧めしない。それだけはたしかだ。ぼくが王子の攻撃を受けながらそれにくっしなかつたのは愛沙のおかげだった。ぼくには王子を滅多滅多にぶちのめしてそこを飛び出すことができたはずだった。ぼくはぼくのパンチが相手をぶつとばせないことを知っていたのでまずは王子に対して奇声をあげて脅しパンチをくらわす。肉体的衝撃よりも精神にダメージを。胸ぐらをつかんでひざまずかせこき下ろす。ぼくは頭の中で完璧なセッティングを構成した。何度かにわたって修正等を施したのでぼくに負けはないだろうと思われた。王子にはぼくの考えなど読めなかつたろう。やるかやるまいか、ぼくの鍋はぐらぐら煮詰まっていた。

シチューにパセリを振る前にぼくはまさに今これが愛沙のおかれてる状況だとしたらと考えた。やるのは簡単だ。しかし、そのあとどうする？だれが助けてくれる？感情を捨てる！冷静になれ！本当に得なほうはどっちだ？どうしても我慢できないのか？また一から一人でやりなおしか？ぼくは金を稼ぐことを選んだ。ぼくは愛沙が隣にいないならせめて同じ気持ちで生活してみたかったのだ。ぼくは愛沙を選んだ。コンロのスイッチを切った。この場合、例えるなら王子は誰もが羨む絶世の美女で大金持ち。ぼくに犯されたがっていた。愛沙はぼくの恋人でぼくを信じていた。ぼくは愛沙がいないからといって美女を犯したりしなかった。余分なお金も貰わなかった。

ぼくは約束の期間である春がくるまでその国で勤め上げた。ぼくはその国で愛沙の気持ちのかけらを手に入れた。もちろんそういうつもりになっただけかもしれないが。ぼくにとつての真実だった。

新しい春がきた。ぼくと夏美はタッグをくんだ。地獄から抜けるためのタッグだ。すべて計画通り。計画通りいけば地獄から抜けられる。計画は形にするともたやすいことの繰り返しだった。朝の9時から夕方6時までの9時間労働。大学に通い9時間ばかり存在するという労働。そしてそれから帰るといふ労働。月から土曜日まで6日間、週54時間、年間では何百、何千か？金にはならない。卒業のための労働だった。ぼくらは刑務所の服役囚も同然だった。2年引きこもった罪で2年服役した。慣習となった二度寝は許されず、深酒も禁じた。一回90分の授業を5セット、計450分。いすに座りつづけた。座って我慢続けた。サッカーの試合ではないが90分、ぼくと夏美はベンチで座り続けた。スタメンではなかった。それが一日、5回。ぼくらはベンチウオーマーの役目のみずからに科していた。試合はつまらない域を越えていた。だが味方のサポーターは時に大騒ぎだった。ぼくと夏美の精神は崩壊寸前だった。ぼくらは二年前に越えていなければならぬ山を強行軍で越えていた。それはカルタゴの兵士のようにだった。それは二人にぐうの根もださせなかった。ぼくらはそこで何を学んだのだろう。忍耐、服従、計画性、継続、勤勉、協調性、。ぼくらの二年にわたる怠惰、倦怠、墮落、あきらめ、憤り、消極性、無秩序。ぼくらは白地に黒を赤に青の色を混ぜていた。ぼくはさらに学校のトイレでオナニーをしていた。気が狂いそうだった。我慢できるかできないかでいえば我慢できなかった。ぼくは休み時間にだれもいない階層のトイレに入った。やっと一人になれた。その日のその授業は特に我慢ならなかった。耳障りなおしゃべりとなやまない笑顔がぼくの神経を逆なでした。ぼくらはなぜあの仲間に入れないのか、なぜあの連中はあんなに楽しそうなのか。ぼくらは二年分の重みを背負つ

ているからそうなのか、連中はいつ見ても生まれたてでぼくらは年老いたロバだった。そのロバの頭はドアに肩をより掛け両足を踏ん張りこの無念を晴らそうと白い息を吐いた。無言で吐息をふき取り仕事にもどる。部屋に戻ると幾分かは馬鹿騒ぎが収まったように感じられた。ロバの目にわずかながら光が戻った。静かな強行軍は続いた。

その日も足をもつれさせながらぼくは現場に登場した。無表情でタバコを吸う夏美に会い、一日二回の内の一回目、笑顔がこぼれる。ぼくらは排他的だった。エゴイストなツートップだった。朝から笑顔のワン・ツーを決めて今日一日という一点を取りに行った。ぼくらは積み重ねた。リザーブリーグで結果は残せるようになっていたが苦痛ばかりだった。少しでも立ち止まると涙がでそうだった。ぼくらの幸せに対する対抗意識と多数派に対する反骨心が行軍をささえた。誰もぼくらがやったことについてなんてこれないぜ。その証明のためには勝たねばならなかった。形にしなければならなかった。まず自分に勝つのだ。体を精神が動かした。清らかな魂。一途な思い。自分で自分を励ます。足が動かねば手で押して歩いた。息をとめ片目のまま朝の扉を開いた。布団をかぶり枕にかみついて叫んだ。毎日、同じリズムを同じ時間だけ刻んだ。無駄がないと言えば無駄がなかった。あるときぼくに見えていたのは二年後の勝利だけだった。

蛍光灯の光がぼくを損なっていた。テレビの明かりもだ。ぼくはその判断にいつまでもこだわりの、望む物がみつけれないまま今ある物を捨てていった。ある日、ぼくは片目が潰れ掛けた猫と仲良くなった。それはぼくのリズムと波長にぴたりだった。その猫は飼い主よりぼくになついていた。飼い主からぼくに餌代の千円札が送られてきた。あるときは猫がぼくより一日の食費がかかったから納得だった。しかしその千円は10日分でなかった。ぼくと猫との最後まで

での分だった。ぼくは猫をミーシャと名づけた。始めはぼくが9時間の仕事から戻るとそれに併せて全速力でぼくの部屋のドアの前に駆け込み一緒に中に入るだけだった。そこで飯を食うだけだった。そして喰い終わるとまたドアの前に行きミアミア泣きだしぼくはドアを空けて外へ出してやるのだった。やがてぼくの日常がよほど単調だったからか、朝にもミーシャは顔を出すようになった。ぼくはミーシャの鳴き声で目を覚ましたこともあった。ドアを空けていっしょに朝飯を食った。猫の種類は詳しくなかったが三毛猫といわれるたぐいのようなだった。全体としては白っぽい、銀というか灰色というか、タバコの煙の色だった。ミーシャがいつぱしのレディであることに気づくのに時間はかからなかった。ぼくの見ている前では粗相をしなかった。暗黙の了解でぼくは部屋のトイレの窓の間をとおれるくらいに空けておくのだった。そこから彼女は出入りした。ある晩、御飯を食べて一緒に寝入ってしまったことがあり、ミーシャの鳴き声で一時目を覚ますがシカト。続けて、寝むりに入っていくと、しばらく、ぼくは心臓が止まりそうになった。野生を感じた。ぼくのほおからは出血がみられ、原因は彼女だった。彼女は小便がもれそうに違いなかった。小さなぼくはそれからすこし彼女に対して臆病になり窓をあけておくことにしたのだった。ある種、二人の関係の主導権が彼女に移った分岐点だった。それでもぼくは関係の継続を望んだ。窓を開けておくようになると彼女は元の飼い主の元に戻らなくなった。毎日、ぼくのところへ飛び込んできた。ぼくが学校に通うようなものであったかは知らない。仕事から帰りドアを空けると窓からあらかじめ進入していた彼女のお出向かいにあう。ネズミを持ってきていた時は本当にびっくりした。ぼくはそれは漫画やお話の世界での事だと思っていたからだった。趣向の違いを感じた。こんな感じでミーシャとの生活はぼくの生活に驚きと彩りをあたえた。

毎日は続いた。ぼくの計画の詳細ではその年中に地獄に渡らねば

ならぬ川があり、ぼくは地獄に橋を建設中だった。その橋の色は彼女にちなんだものにするつもりだった。それが唯一の遊び心で、ぼくの現状はやはり誰が見ても酷く、ついてきたのは夏美とミーシャだけだった。その年は何人かのグループで短期の研修や実地の訓練めいた事をする年でもあった。グループ内の語らいでぼくは特殊だった。最初は信じられないという顔をされ反笑いで励まされた。ぼくは橋を建設中だといった。一年で橋を掛け次の一年で渡るのだと人々は無理ではないが無理だという顔をした。誰も橋を架ける必要のあるものはいなかった。みな定時に出るフェリーに乗り遅れることはなく向こう岸に渡っていた。どんなスカしているやつもそうだった。ぼくは大抵のだれもが偽物のかっこつけだということに気づいていた。みなやることはしっかりやっていた。ぼくのいる位置は低かったが能力では劣っていなかった。ぼくはやはり確信していた。これでいいのだと。ぼくの話しや行動は連中には変わっているらしかったが、ピントはずれていないようだった。そのグループですれ違った思いをしなかったのはミーシャの影響が少なくなかった。ぼくは連中の何人かと飯を食ったり、挨拶したり、しっぽをふんずけたりした。そこでの交流でぼくは連中の力の源を探ろうとした。夏美からするとぼくが連中に取り入っているようにみえたかもしれない。そうではなかった。ぼくは心底連中を憎んでいた。連中から秘宝を盗まねばと肉をたった。ぼくを救わねばならなかった。夏美に光を見せたかった。ミーシャには最高にうまいフランス製の缶詰を。ぼくは願った。

復帰して一年目に橋を造った。結果はお釣りがくるほどだった。勝利は見えていた。ぼくと夏美に光が射した。笑いが止まらなかった。ぼくらは雪道を滑って転んで笑いあった。一年かけた橋は一日ぐらいの放蕩ではびくともしなかった。天に唾をはいても許された。ぼくらは小さな世界を思い通りに動かしていた。ぼくらは牛井とカレーライスのWセットを二つ大盛りで頼んだ。いまでも値段を覚え

ている。お一人様880円。ぼくは部屋のドアの前に雪だるまを作り帰ってくる頃には中のシャンパンがキンキンに冷えて出現する仕掛けを施していた。結果発表はあくまでも確認だった。ぼくらは一年間一度たりとも計画を外さなかった。天気予報のようにあいまいではなかった。ぼくの部屋に帰り夏美とミーシャと乾杯した。どんちゃん騒ぎだった。隣の部屋で恒例の愛の営みが行われていても笑うことしかできなかった。なにが、あんあん・ハート、だ。と思っただ。くすぐったかった。それはとても小さな事のように思えた。その日に限ってはぼくはきつちり隣に借りを返していた。心強い仲間もいた。ぼくは瞬間、連中の秘宝を手にしていった。なるほどたしかに人生はおもしろおかしくなるようになった。ぼくはその効率の悪さに半ばあきれながら今を楽しんだ。

ぼくは地獄も地上もかわらないのではという疑問を抱くようになっていた。どちらも誰もがかつてに息詰まって孤独に耐えられないでいる結果のようだった。みな水中で息を止める練習をしていた。たらいに顔をつけるだけ。目なんてあけられない。何度も同じ事を繰り返してなかなか先へ進まなかった。調子になんてのれそうもなかった。リズムはどうやらみんなでつくるらしかった。社会においてぼくらは雨だれの一粒一粒だった。小細工は必要なかった。芸術的には美しく音楽性にすぐれていた。しかし、ぼくは一度はじけた粒がもう用なしであることをしっていた。また天に昇りリズムを刻むのに膨大な時間と労力を要することもわかっていった。そしてその不確実性も。そこに意志など入り込む余地はなかった。ぼくと夏美は地獄から地上へ上がっていく寸前だったが、やがてまた落ちることになるのだろうか。その点を考えると、登っていく途中に決めておくべき事があった。クリームとヘアドライヤーで髪型をセットすることとはまた違った決めごとだった。暇などないように思われた。なにか対策を打っておくべきである。ありとあらゆる手段を講じておくべきである。平時に備えを。いろいろと気苦労が多かったが、

それはぼくの得意分野だった。ぼくはその日から真夜中のスキューバダイビングをはじめた。口は災いの元だが口だけが大事だ。ぼくらはいつだって災いを転じていかなければならない。えら呼吸できないのだ。みな学生気分だ。社会だろうがなんだろうがすべて小学校と同じ事をやっている。どこでも教師と教科書が必要なのだ。模範の模倣。だれもなにも言う資格などない。ただだまって盗め。それでいいんだ。その一方でみな極度の照れやだ。誰もが顔を隠す傘を用意して行動する。別にいいじゃないかと軽くやつちゃうやつから死んでいく。ジョークはいつても行つてはいけない。口だけが大事だ。えら呼吸ができないのだ。簡単に泳いでも失敗するだけだ。悪いお手本となり、眺められる。頭の皿が乾く。その視線は熱い。連中の頭の上には雨が降っており、濡れないように傘をさしている。なんでもやってみてという感じがしない。地獄からきたやつにまずやらせてみるのだ。様子をみてからでもおそくはない。水だ水。人は水だ。誰もがどんな形でもねらっている。水である限りみなと同じ水である限り、勝利の隙間に潜り込める。それをじっとまっているんだ。水であり続けるために仕事をやるのだ。ぼくは地獄で水を飲み干したがそれはあまだれの水だ。ぼくは水になりたいのではなく水を飲むのだ。うまい水をだ。集団は団体は流行は製品は水だ。どこの会社もどこの工業も水びたしだ。水が店で水を買う。古くなつた水は食あたりを引き起こすからだ。水の品質管理は各人の都合だ。ぼくは人は水説をとある海底で発見しかけたがやめた。なんとでも言えるのだ。それが水だろうが花だろうがピカチュウだろうがだ。

・・浮上。

一日目のダイビングは終わった。潜水時間は短かったがポイントはつかんでいた。あたりを見渡す。体温の低下はなかった。周りの気温が落ちていたがむしろぼくの体はカッカしていた。潜るべき海はたくさんあった。そして、海にペケ印をつけるペンはぼくの頭の中だけにあった。海がぼくの頭の中にあるともそれはいえな。一日ばかりではクリームもドライヤーも発見はできなかつたが手応えは

つかんでいた。とりあえず一つのペケはついた。発見とは1000の中から99を除くことだった。あるいは1000の中から999を5687回から5686回をでもよかった。ぼくのやり方はいつも遠回りなのだがこいつほどあてになるものはそうなかった。正確をきすときのやり方だった。ぼくは自分のカンに頼りすぎるきらいがあつたからこれでちょうどよかつた。適当なことはカンで済ませるがそれ以外はこうしていくのだ。ぼくはベテランダイバーになりつつあつた。自信とはこうした積み重ねによって生まれることを知っていた。

山を越え川を渡り海にもぐりはたして、敵かな雰囲気のなかぼくは数分ごとに「うっ」を繰り返していた。積み重ねた我慢が最後の言葉「エ」をいわせそうだった。隣には夏美が静かにあたふためいていた。試合はロスタイムに入っていた。酒臭かつた。ぼくらは一点差を守り切らねばならなかつた。ボールはぼくの所へ集まつてきた。ぼくはボールを左右に散らしたまた預かつてを繰り返した。もうすぐだ。勝てるのだ。体は限界だった。ぼくは朝から顔面蒼白でいい男だった。汗が乾き額はスケート上の寒さだった。一つ。また一つ。しわが刻まれてリンクが割れそうに痛がつていた。ぼくの目は大きく開き乾燥していた。ぼくはその目で勝利の瞬間をつかもうとしていた。神経はときすまされていた。勝利の足音は確かにぼくの耳に感じられた。勝利の天使がぼくの肩に綿のような毛布をかけて包んでくれた。瞬間、ぼくは足の裏まで愛されていた。全身の血液が薄まつてうすいピンクのソメイヨシノになつたような心地よさを感じた。勝利のホイッスルが吹かれ、そろそろと流れる人たちはそれぞれに勝者であるに違いなかつた。しかしぼくらほどに勝利を感じているものはいなかつたろう。彼らはどこに向かうのか？ぼくの向かう先はとりあえずベットだった。急をようした。正確には布団の中で戦いは終わった。ゲームオーバーではない。エンディングつてやつた。ぼくの部屋はがらんどつた。ぼくは布団にはいつ

くばり最初の頃を思い出していた。ほぼすべてが揃っていたこの部屋。ぼくはそれを維持できなかったのではない。ぼくが最後までやり遂げた結果なのだ。ぼくは真実をつかもうとした。そこらかしこに踏み込んでいった。その結果なのだった。部屋には一台のパソコン。プリンタ。それらをつなぐ線。布団。木の戸にはミーシャのひっかけ傷。部屋にあるものすべてが指折り数えられた。最後の一年はそれだけで過ごした。洗濯機もテレビもオーディオもビデオデッキもオーブントースターもガスコンロもやかんも処分した。ものを捨てるために払うお金はぼくには価値があることだと有意義なことだと思う。そしてミーシャともお別れだった。窓を開けなくなつて彼女はしこたま泣いた。ぼくは徐々にそして急激にミーシャを受け入れなかった。夜中に戸口で泣かれるのは明らかに近所迷惑だった。ぼくは眠つたふりをした。たまに隣やその隣の住人が中に入れてやつたみたいだった。ぼくこの町から、この地獄からでていく人間だった。そしてミーシャもそうなのだった。切符はぼくが一枚。夏美が一枚、ミーシャが一枚。ミーシャはある意味、この部屋で愛沙のかわりだった。この町でこの地獄で最後にはミーシャはぼくの姿でもあった。ぼくはいつまでも何回もこの最後の一年を振り返つた。そして思い出していた。それは特に言えば1月。2月とか3月。と、4月のついたちのことだった。前半ではぼかたはついていった。

愛沙。彼女は地獄の目覚まし時計。あのとときのぼくは手一杯。あんな姿をさらしたのははじめてだった。あのととき以来だ、ぼくの世界を自覚して持つようになったのは。愛沙時間。愛沙をみてぼくは過ごし考え動いた。ぼくは愛沙を背負つて日常を歩いた。自分の中で一番好きな人の前で、一番情けない姿をさらす。2度も。それを意識的に行う義務をぼくはもっていた。ぼくの唯一の手段だった。ほかに手だてがない。どうしようもない。そのまましていくしかなかった。自分で考え、実践する。これほど恐ろしいことはなかった。実践に今、一番欲しい彼女を選んだのだった。ぼくはプロポーズを申し込むようだった。ぼくは変わったつもりだったが鏡は外見の変

化をぼくにみせなかった。ぼくの判断はぼくの負けを予想したがぼくはそこにむかった。ぼくはいわゆる強くなつたつもりでいた。強くなれば彼女にふさわしくなれると踏んでいた。あわなくなつて一年ばかりだった。会わなくなつてなんて言うのも恥ずかしい。愛沙にとつて新しい方角から風が吹いた程度のものだつたに違いない告白。ぼくはこの一年の戦いの成果をそしてこれから確実に手にするであろう勝利を愛沙にみせたかつたのだ。ぼくは現場に向かった。ぼくは本当にプロポーズを申し込む覚悟だった。愛沙をレイプして中だして子供を受胎させそれを元に結婚に持ち込もうとも考えた。中途半端はこのさい困るからぼくは大迷惑にしても終わらせなばとおもつた。始めたかつた意識するには事前調査で彼女の姿を見たときに不可能だと悟つていた。ぼくが彼女に支配されている自覚を持つくらいに愛沙は光輝いていた。太陽と太陽系の小さな星との関係だった。対等の位置にたててはいなかった。一年ばかり人の3倍戦つたのでは、愛沙の絶大なるオーラの前に対峙するのが精一杯だろう。その年の4月1日が雪だったことを正確に覚えているのはぼくひとりでかまわない。その日4月に雪が降つた。何かの歌のようだった。ぼくは前々から機会をうかがつていた。その日も一度、愛沙に勇気をもらいにいった。その日も相変わらずぼくにとつて愛沙は光り輝いていた。ぼくと目が合い、一瞬どきつとおどろいたようだった。昔の風を思い出したのだろう。どんな印象がおもいだされたのか。ぼくは考えた。「久しぶりだね。」と笑顔で言われた。ぼくができるはずの辛口も皮肉も笑顔のどれもしめさなかつた事に彼女はまたも深刻さを感じてくれたようだった。太陽の暑さがやわらいだ。当然だ。外では雪が降つていた。ぼくの魔法だった。彼女はどきどきしているだろうか。してくれているならそれだけでもいい。一気に場は時間を戻した。ぼくは注射を恐がる子供のようにだった。さんざん泣いた後、為すすべもなく針を迎え入れる瞬間の子供のようだった。(またあの続きをやるの。何回やっても同じよ。)

とぼくの中の愛沙はいった。ぼくは「ああ」とうなずき、うつむい

た時点で普通つぼくふるまっていたのが消え失せた。(ああ、だめだ。)と言いたかった。場ちがいな洋服屋か宝石屋にいるみたいだった。それから何枚も言葉のコートを次から次に着てみてくださいと重ねられ、着込み、ぼくは重く立ちつくしていた。あれこれ話したのだがあまりに差し障りのない挨拶で覚えていることはなにもなかった。目の前のダイヤはポケットにいれて持っていくようなものでも電話予約してあとで取りに来るものでもなかった。最終的にはぼくだけの恥ずかしい目的を果たして帰路についた。ぼくは告つてもうここには来ませんと言ったものだった。もうすこしで、すみませんなんて言うところだった。愛沙はなにも言わなかった。気の毒におもわずにはいられないぼくの状態だった。ぼくはなにも言わせなかった。そんなつもりだった。ぼくは振り向かずそこを後にした。昔のやりとりを思い出す。「あなたのものにはなれないの」それは変わっていないぼくへの答えだった。

死にかけの蜂がぼくの部屋に迷い込んでくる。始めは騒がしくまるで死に際の存在をぼくに気づいてくれといわんばかりに。やがて蜂は落ち翼は機能を失い黙り込む。ようやく自分の体三つ分体を動かす。もうなにも見ていないのか。見てほしいのか。ぼくは蜂の最後を見守る。飛ばないのか飛べないのか、体の向きを変えるだけか、歩くだけか、それだけか、それまでか。お前は体を傾げぼくが朝目を覚まし仕事に行くとき死にタイをさらしながら踏まれないように気を付けなければならぬ。ぼくがそれに気づけば踏まれないし運がよければ踏まれない。死んでからの事を心配できるのは生きているうち。遺言はあるか？そんなに足を並べてたたむな。足をなでるな。蠅じゃない。そうだ歩け。すすめ。死ね。何も言わずただ黙って死ね。ぼくは寝る。お前を決して踏まない。

映画館のあるそこは大消費地帯、人々の欲望のマグマ。安易な決定、慣習と倦怠が生み出した定休日のないその地域ナンバー1の規

模を誇るぽりバケツ。大型シヨツピングセンターはこちへんのブームだった。久しぶりに会ったリーダーは間違いなくリーダーだった。

「ブームって英語か？」とぼくが聞くと、「モードはムードの中にある。しかしムードはモードたりえない」「ブームはその親」と、つぶやいた。

今日のリーダーの語りはそれぞれ一匹のモンシロチョウのように単独で、それがすでに何匹か飛び去っていた。そして見えない花粉がそこらにまき散らかっていた。春にはまだ遠かったが、いつ何時でもその気配はあるものだと思いしらされた。ぼくはあまり語ることながかった。最近は事にそうだった。ぼくの口からはたばこの煙が器用に吐き出されるだけだった。あとで辞書を引くとブームは英語らしくかった。ぼくはそれをあとで誰かとの語りに使おうと、それらが記憶に残ることを思い一本のたばこのかわりにした。

ぼくらの車は月のクレーターほどもあるのではと思われる駐車場を一周しそれぞれに作られた小さなあり地獄のような白わくの線の巢のたつた一つにきちんとのみこまれた。ぼくはチャンスをいかせるならばそこにかわいい女の子と来る予定だったのだがそうではなかった。ただ、すべてのチャンスはいかせるものではないということもぼくはしっていた。はからずもリーダーと訪問したナンバー1は年をとって家族でこんなところにきたくないところだった。いったいこれは誰の夢だろう。だれのアイデアか。人人人。ここには沢山の家族つれ、カップル等々がいた。だが、ここにいることをその人たちが望んでいるとは思えなかった。ハットきずいてこんなにも息がつまるところはあまりないはずなのに、皆寝むらされていた。ぼくはリーダーとここにこれにて正解だった。ぼくは一つずつだが学んでいた。ここも彼女と来る場ではない。ぼくは考える。今のところ彼女との場所はぼくの閉じた目の奥にしかない。過ぎ去った時間がそこにはあるのだがそこはここよりはるかにまじだった。「世の中が狂ってる」ぼくは夏美の言葉を使った。

目に映るのもが憎い。だからといって目を閉じている訳にもいかない。ぼくの朝の最近の問答はこれだった。ぼくは目を、耳を、鼻を、ありとあらゆる体の器官を酷使して望まねばならない。小さな物置に象はのらない。象は人の言葉など理解しない。毎朝誰もぼくを流れに乗せてくれるはずはない。ぼくはギアをバツクに入れ高速の合流をしなければならなかった。こいつはどう考えても苦痛だった。一日の士気の8割がここに費やされる。最初が肝心。あとはなるようになる。先手必勝。ここ何年間ぼくの敵はこいつでこいつを毎朝ぶつつぶした勢いで一日を乗り切っているといつても過言ではなかった。あとの敵はおまけでクライマックスともいえる山場はちじれ毛やみみずのたぐいだった。ぼくはそいつらを散々に蹂躪した後、血塗れで帰路につくのだった。たどりついた部屋でテレビをつける。とサッカーのゴールシーンをまとめた映像が流れていた。いつまでたつてもぼくのプレーはでてこなかった。ぼくはその前の前のプレーに関わっていたのだ。そこはすっかり編集でカットされていた。ぼくはそれをいつもおそろおそろ覗いて見ていた。地獄を越えてきたぼくだったが見たくないものはある。この世の輝きだけを求めるならばぼくは一年で計何分間生きていることだろうか。ぼくは早く見るべきものを正確につくらねばと思った。

車をむち打って走らせる。ぼくにはカッコつけたり、逆切れしたり、敗者がひたる感慨などはないのだった。それらはぼくのなかでもうすんでいたことなのだ。経験ずみだった。ぼくは負けすぎている。ただある自信は自分がまちがいに負けたのだという確信。負けはよどみなく美しい。ある意味そういえた。命はここにありかろうじて生きている。どん底からはいあがり上を目指す。負ける前までは引きもどした。そしていまは泥臭くも勝利のために小石をつみあげながらも毎日実験を怠らずでつかいのを狙ってる。そののなにが悪いのか。ぼくは現況をとりもどしていた。分析してそれぞれに意味をあてがい、終わらせる物を終わらせた。だかららは駄目だ。

切る物は切っていかないと。何度やっても駄目な同じ事を繰り返さないように。

はたしてそれをわかっていながらぼくはノルマでもあるワイン一本を空けようとしていた。テレビではAVビデオがながれていた。真理からの連絡は途絶えぼくはいつもの暇人だった。ビデオの中の娘は絶品だった。がそれは眺めているのにだった。明日、気違いのリーダーは気違いを起こすと予言してきた。ぼくはリーダーのオナニー姿など想像できなかった。それはリーダーのよいところだった。フランスパン1本が腹の中に収まった。このパン一つでなにができれば？ぼくは眠りの病を押してひさしぶりの休日をもてあそんだ。ワインを買ってパン買ってチョコを少しとチーズがある。たまにはジャムよりピーナッツバター。夜を越える算段として間違っていない。見るべきはHビデオ、サッカーの国際生映像。これで夜更かしして昼に目覚める。世界はすばらしいと思う。オナニーを独学で覚えて以来から一人だった気もする。自分の型を作ろうと躍起になった。だからといって特殊なことをするわけでもできるわけでもなし。習慣。ちんぽが自分自身だと考えると大抵のなにもかもがどーでもよくなるし、またなおさら自分が愛おしい。勃起して射精。だれもかれもがだ。仕事に精を出す。旨い言葉だ。精を出すんだ。何回か繰り返した。何度も何度もくりかえすべきか？ぼくは奇跡や大逆転のたぐいの何かを信じていたが駄目なものだ。魚のいない湖で釣りをしているみたいだ。魚はいないのだ。何が釣りだ。何を釣るんだ。ぼくはがっかりしていた。釣りだ、釣りだと皆がさわいでいる湖に魚はいないのだ。ぼくは強大なものをうしなって得られなかった。ぼくは釣りに夢中になって湖の事を知らなかったのだ。ぼくは大逆転する場、を間違っていた。たとうならぼくが魚だったらおおがちだった。ぼくが湖の管理人でも勝ちだった。釣具屋でもまあまあだろう。とにかく立場をかえねば、向きをかえなければ。そうすればあとは勝てる。大勝だ。ただこうしてここにいるだけのためにどれだけのを費やしたろう。当たり前？ふつう？費やした

よ。かなり。普通にみせるために、普通の水準になるために、ずいぶん。そして今は普通の水準をすこしでも上に引き上げようとしている。それで、だから、いっぱいいっぱい、なんだ。なにもつかめんのはものを信じないからです。見るもの、聞くこと信じません。この生さえも。自分が人間であることも。人間とはなんであるかも信じません。明日が仕事が休みだというのに目を開けたくありません。目をとじたままあっちこっち行っている自分を想像します。結果、目を開けたくありません。想像がつくのです。そして現実想像以下だから目を閉じたままです。夢を見ます。忘れます。これ以上寝ると頭痛が痛くなる直前までねます。直前がどこか見定めるには自信があります。お酒の酔い加減と同じです。自分をすることです。ぼくはここでつかめるものの大概を手にして終わってました。

今日一つの夢が消え新たな夢が生まれた。ぼくの燃え上がる情熱の炎はわずか三日で沈下した。自然消滅。被害は自分。ぼくは灰の中からまた蘇るだろう。だんだんやり方がわかってきた。だんだん夢の見方がわかってきた。自分の夢をつかめ！自分の言葉で話せ。声で行動で表現しろ！今よりあと一步前へ。確かに進んでいる。見せられているんじゃない。見ているのだ世界を。ぼくのマホーは三日でとけたがぼくは暴走ハリケーンではない。留まることをするのだ。

秋は深まり、確か十一月だ。ぼくはその月、仕事以外で部屋から一步も外へ出なかったように思う。だからではないが夏美がとんでもない事件を引き起こしたなんて年の暮れの忘年会で白子から聞くまで知ることなかった。ぼくはひっそりと冬の訪れを待っていた。通信手段を絶っていた。ぼくは静寂を好んだ。実際どこへも動いていないのに遠くへ来たというかんじがした。夢は残骸の宝箱。ゴミ箱の精子。希望に充ちて買った品物の残りかす。あれもこれも夢

であって現実とはそのゴミ箱としか繋がってない。ああそうだ、その月もまだくじは買っていた。結果は全然駄目だった。その辺当たりからぼくの予想はくじの中身よりも自分に対して向けられていた。ともかくにも今この場所においてこの状況でぼくが買うくじはことごとくはずれるであろうことにきずいた。なにかの大きな力、制御する力、均衡や輪廻、集団に属するものの義務らしきものを感じた。ぼくの博才は掛けるのを止めるのが勝ちと判断した。なにもしないで勝ちだった。しないことが勝ちのぼくの今の状況だった。ぼくは大したものだった。ぼくの読みはいいものだとうぬぼれた。そして欲をだした。こつからがホントの勝負かもしれない。ぼくは掛け金を少額にして賭の継続の道を選んだ。しかし、少額にしてぼくの掛け予想もみみっちいものとなってしまっていた。ぼくはくじを買った後自分の予想を眺め愕然とした。それは自分の本性が浮き彫りにされているかのような買い目だった。それから本当にぼくはくじでの人生逆転勝利をやめた。それはただ続けるだけのものになってしまった。くじにおける常勝軍団の一員になってしまったぼくはいつか回って来る自分に与えられる配分を待つ情熱の失われた年金暮らしにすぎなかった。ぼくは毎週少額の掛け金を納め少額にちよつとばかり毛の生えた未来を予想した。ぼくはやっぱり負けていた。ひとりでもそうだった。

夏美は死んだ訳ではないにぼくらの前からいなくなり仕事を辞めていた。ぼくはこの言葉の意味を考えた。夏美は死んだ訳ではない。ぼくらの前から消えた、たぶんもう会えない。ということはどういふことか。死んだ訳ではないのかやはり。死ぬということ生きてるということ会えないということいつか会えるいつでも会えるということ。いつも会ってることが生きることと会わないでいることが死に向かっているということ。会えなくなるのは死んでしまうということ。

「夏美はそのほうが幸せなのかもしれない」とリーダーはいった。

ぼくは最初、死んで正解。と聞こえたものだった。

日々の生活の濁流が夏美の心を茶色に汚していた。あらかじめ汚れていれば気にならない。泥をぶっかけられた白いシャツはそのままだに黙々と仕事をするのが夏美だった。人の2倍仕事をしたからといって2倍の賃金をもらえるわけではなかった。3倍気をくばっても3倍の順調にあやかれるわけでもなかった。

「地獄で会おう」夏美のかつての言葉が気にかかった。部屋に舞い込んだ死にかけの蜂を思い出した。

動けばヘコムこともあった。動かずに沈むこともあった。だからどうしろと言うわけではない。ハイになれば良いというわけではなく笑えば楽しいのではない。汚染は徐々に規模を増して年に何回かの掃除では追いつかないようだった。

夏美は不思議な魅力を持っていた。真夜中のカップ麺だった。かき回す脳味噌がぼくの夏美。そしてボギーの夏美。白子の。リーダーの夏美。夏美はぼくらそれぞれに影響を及ぼす。夏美にとってぼくら一人一人はどうなのだろうか。ぼくは夏美といると孤独を忘れた。夏美の部屋に袋一つで米をもらいに行つたとき夏美はそのドアを開けてくれた。松茸のお吸い物も貰った。

ぼくは夏美に甘え、ぼくの地獄の折り返しにタッチできた。ああこそ、夏美は、夏美の地獄はもつと深かったのか。夏美は心から世界を憎んでいた。果たしてこの世にホントの意味での薬はあるものか。夏美の咳を止める薬を、世界を憎む咳をする夏美をとめるのだ。夏美の咳は天まで届いているのだ。あの咳は止めなければならぬ。夏美のために。咳ではなく歌を歌うんだ。賛美歌のたぐいの歌を。それもファックではなく、本当の愛と喜びの賛美歌を。そうすれば夏美は幸せになれるんだ。ああ夏美。ぼくの咳は決して天に届かない。だが君には届く気がするんだ。だから聞いてくれ。ぼくが君の側にいるようにぼくの地獄を少し見せよう。地獄で会おう。地獄の

過ごし方を二人で。また二人でみれるように。

夏美。朝起きるんだ。ぼくがいなくても起きられるはずだ。10時でいい。千円札をもって近くのホームセンターに行くんだ。キャンプ用品のコーナーでナイフを一つ。どきどきしながら買うんだ。大丈夫うまくいくさ。ナイフは別に袋に入れて貰う必要はない。「そのままです。」とレジでいう。シールを貼ってくれる。それをジーンズのポケットにいれ部屋に帰るんだ。どうだい。うまくいったろう。これで準備は万端。夏美、冷蔵庫にお中元やお歳暮で貰い巡り巡ったハムがあるはずだ。奥の方に眠ってる。タイトルは真夜中のバストラミポーク。ぼくにはそうかいてあった。そう。真つ暗にあたりが鎮まるのを待て。部屋の明かりは最小限にして。ナイフを取り出すんだ。タバコに火をつけるまえにそいつを良くあぶるんだ。ハムじゃなくナイフをだ。ハムは真空パックされているはずだ。よく焼きを入れたそれでハムを切るんだ。下に新聞紙を敷くといい。ティッシュも用意するんだ。真夜中までまだ時間があるって？忘れていた。服を脱げ。裸になるんだ。お酒をゆっくりテレビでも見ながら飲むといい。ご飯はくうな。腹を膨らまさず。酒を飲んでいるんだ。そして時がきたらハムを裂くんだ。ナイフでさして食べるんだ。片手に酒のグラスをもちその都度ハムを自分で切ってナイフから直接口に運べ。ハムを一個まるまる食べ切るんだ。一人でだ。だからお腹がいっぱいだと駄目なんだ。ハムとナイフと酒。酒は焼酎といきたいところだがビールでも許そう。ただし缶ビールにしてくれ。空けられた缶が無秩序に並らばる美しさは知っているだろう。「あれは床で見られる星座だ」と君は言った。そのとおりだよ。夏美。また連絡する。

夏美はいなくなつたがぼくの生活は回った。ボギーや白子やリーダーの生活もだ。車のガソリンのメーターは特に急激には減らなかつた。リーダーが夏美の事について話し合おうと音頭をとつたが誰もすぐには賛成しなかつた。それはリーダーがフリーターだったか

らかはわからない。それはボギーや白子だけでなくぼくのカンにも少しふれるものだった。みな何もできなかったことにイライラしていた。みなそれぞれがそれぞれの夏美をおもった。生活は両手両足をしばられ電子レンジにかけられているようだった。みな夏美が好きだった。ファクトリーは今日も動いていた。白い煙が夏美のタバコを思い出させた。くそ寒い冬だった。ぼくは誰にもいわなかったがフランス人のように朝飯昼飯と酒を飲んで仕事をした。誰もが毎日一生懸命仕事をしていた。やたらめったらそいつはぼくの目についた。だからなんなんだ。どんな気持ちで朝を迎え起きてくるのか知りたかった。皆が仕事をしていた。気持ちはどこにもなかった。ぼくもまじめだった。くそまじめだった。酒を飲もうが心うらはらだろうが偉い皆の仲間だった。そして夏美はかつての同僚で今は違った。

ぼくはときどき言葉失調で自律神経もおかしかった。この用語が正しいかどうかわからない。わかりやすく言うと、簡単な単語が表記できなかつたり声にして言葉にできなかつたり。暑くないのに汗をかいたり、わけもなく無く動機がするのだった。このようなあやうべき個人の素人判断はいけないのだろう。だから誰も良くわかつてくれないし、いつまでも曖昧なままだ。ぼくはじよじよに、突然ではなくてじよじよに壊れ掛けていた。思いこみがどれだけの日常を作っているのか。そして例えば医師の診断による答えは、はたして真実か。それを探った。

朝おきて、目をあけるまえに、いつも、これからはじまる一日のことを思う。そうするととたんに起きる気がしなくなる。すべてがおもいどおりにはこぶだろう。何時に何をし、何時に飯を食い、何時に肩こりはじめ、吐き気がし、何時まで仕事をし、何時には帰れる。ぼくは日々の積み重ねが何を生むかを考える。月給とか歳月とか。ぼくはおろかだから突然にはあまりうかばない。ぼくは毎日が

給料日だったら。という歌だか言葉だかを思い出す。それは名言のようにおもえる。光陰矢のごとしだとか、歲月人を待たずだとか、日々会わざるは日々疎しだとか、まるで脅迫めいたはるか昔の言葉たちよりやさしく明るい。毎日が給料日だったら、ぼくはまいにち給与をもらいに朝起きることができらう。あるいは昼に混雑した銀行にいくことができる。それだけか。いや、それだけか、いやそれだけでないなにかがその言葉にはあるのだ。日々を積み重ねているむくいとしての罰ではないなにか。罰はいらない。ぼくはぼくの見立てが正しくないのを望んでいたのかもしれない。ぼくのみたてではどうにも、なにもつかめる気がしないのだった。だからぼくは負けて負けて負けても負ける。自分の見立てが恐ろしいから何もつかめないという見立てを逆に証明するために負ける。ぼくはすべてを、なにをもかもつかむらう。それは今までの負けが証明材料だ。ぼくのみたては、何もつかめないという見立ては間違っているのだ。

今日が月曜日という証拠は？タバコをえんぴつ削りにかける。その瞬間が永遠の大きなワンピース。なにを信じるか？誰を信じるか？どの時代を信じるか？三年。三年かけてこの成果。百の努力で百の成果があがるとは限らない。何の努力も時間もなしに千の効果が得られる事もある。ぼくの一週間はぶっ飛ぶ。

「もう、金曜日かー。一週間って早いなー」そういうおばちゃんをくそ扱いたした自分が思い浮かぶ。

「くそ！」ぼくはつぶやき、夏美を思い出す。

「くそ」

みな夏美といると安心する。それはいつも夏美がその隣にいる奴より運が悪いからだった。

「くそ」

夏美は隣にいる奴のために生きていくわけではないのだ。ましてぼくもだ。ぼくの馬鹿っ月はこぼれ落ち、欠け、削れ。満ち。ぼくの疲労はおびただしい。やる気は削げ、睡魔が襲う。今思っても夏美とはいいいコンビだった。お互いの月と運を補うことができていた。だがもうそれもない。空を見上げる。星が輝く。それは夜だからだ。ぼくは間違いなく何かの機能の一つで、社会的には何らかの秩序の一翼を担っている組織の一員だった。それが何なのかはつきりしたことはわからず。誰かたまにそれについていうものがあってもそれは虫ずがはしり、それゆえにそれが真ともとれるのだった。全部燃やしてしまえばいい。ぼくは機能を果たしながら（しょうきやく屋）の社長になる夢を小一時間に渡って思いめぐらせた。それは一日に換算すればわずかな時間だったがその中でもっとも充実した時だった。ぼくはザラメからはじめた。くるくるくるくる廻した。それはみるからに甘く柔らかく鼻からも吸えそうだった。ぼくは燃やし屑が公害にならないようにと一息をさいた。全部燃やす。木も紙も大抵の金属さえも。準太陽。明るさを奪った太陽。熱だけを、燃やすことをだけを。物体を無に返すことを。空に返すことを。すべて夢のまた夢に。時間を元に戻すかのように。地球を恐竜時代に返すかのように。それは退化か？ぼくは考える。燃やしてなにを返すか？空気か？悪しき煙か。雲をピンクにする有毒ガスか？そこは難問だった。ぼくは空から卵が降ってくることを考えた。空が卵を生むのだ。画期的だった。ぼくの体は機能的に働き続けたが頭は働けば働くほど、効果をあげればあげるほど、それをうち負かす方法を考えるのだった。それはプールで浮かびはしゃぎ笑顔を振りまき頭だけをだしている女の子とそれを潜って見る側の世界の二つの側面のようなだった。

思い浮かぶ過去はすべて今を生き抜くためのまやかし。未来を迎えるための呪文と煙。暗い部屋で辺りが静かで空気が好まなければ

快適だった。ぼくはその部屋で物も同然で完全に闇に同化していた。生きている死者。それを確かめるためにぼくはぼくを見たがっていた。ぞつとしたかった。自分で作り上げた物を自分自身を見たかった。ぼくは部屋の掛け時計より存在感を示さず、ときどきうーんとうなりをあげる冷蔵庫よりまだ力無かった。金額にしてぼくは一万円を切っていた。それが何時間と続けばやばかった。だがそれはほんの数十分のことではぼくにはまだ望みがあった。ぼくはぼくを引き上げるのに今どき滑車を使っていた。もうひとりいる。もう半分のぼくはまだまだやる気だった。頼もしかった。ぼくはすくい上げられた。滑車によってもうひとりの自分によってつり上げられ息を吹き返した。

（誰の理想でもない訳のわからないことに力を貸すのをやめる）（そんなもの望んではないだろう）（未来は自分でつくる）ぼくはビールがまずくなるのを了解済みで考えを巡らせた。ぼくは明日も、もうあと何時間かたてばそこに向かわなければならなかった。（ぼくはそこに向かうだろう。）ぼくはそこで何年か勤め上げてきた。そこにいる誰もがぼくはそこであと何十年も定年まで勤めるであろうと疑わなかった。そしてそれはぼくだけでなくおそらくだれもがそこで何十年。そこには王子はいなかった。が、愛沙もいなかった。そこにはぼくだけがあった。夏美はいなくなり。ボギーとリーダーは携帯の中。白子は工場に閉じこめられ、一哉とは年に数回会うのみだった。（この船はぼくの望む港へは向かっていないのか）ぼくの家族の掲げる神はぼくにはぼくだけには手厳しいようにおもえた。（親戚中をみまわしてもそうだ）ビールはますますまぶさくなった。ぼくは養分を吸い上げられるだけ吸い上げられていた。かろうじて生きていた。（からげんきもでねえ）ぼくは真夜中に好物のいもをくった。（ヨーロッパ人のようにたくましくなんてなれねえ）ぼくはアメリカを憎んだ。戦争で負けた日本をにくんだ。（昔に原因を求めるなんていけねえ）いろいろ訳はあるもんだ、こんちくしょう。（日本人の最大の武器で戦えない日本人って所だ。）最悪だ。

「くそめ」

愛沙がいればそのために。涼香を抱けていればそのせいで。力があれば雫のように。

女だったら真理のように。

「夏美」

あの頃を思い出してばかりだ。最近。地獄を抜け出して、抜け出してここは、（どこだ）なんていうのあなたのお名前。（わっちやーねーむ）

「くそ」

「ファック」

なんて言葉ばかりおぼえてんだ。いい教育だぜまったく。（洗脳さ）

「夏美」

いまどこにいる。

「ファック」

いま声があったろう。（あわせたんだ。）

今日、リーダーとボギーからメールあったよ。こっちはあいかわらずさ。

「くそ」

一人でやりあげんのは大変だよ。補償はないし。（火を見るより明らかだってどんな意味？洒落か。）

形にしないといけない。（だったな、たしか）それは証明するためだ。

この世は地獄の海。人の海。その数だけの地獄。ぼくは自分の地獄を越えただけ。けどもぼくは地獄のテクニシャン。年度チャンピオン。恐れるものなどない。

越えて越えて抜け出して、上かとおもってたけどそうじゃなかった。海だよ。平泳ぎ。真っ平らな海。たまにうねりが高さをつくる。

(安心しろ、こんな国だれが戦争しかけるもんか) (占領する価値
なんてないさ。)

ぼくは船を降りた。むしろぼくこそが船だった。吐き気がしたが気
づくには気づいた。

朝になってやはりぼくはそこへ向かったが、明らかにいままでとは
違っていた。それは火を見るよりそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5549c/>

少年

2010年12月14日14時50分発行